

通学班長になって

6年生になって、私は集団登校の班長になりました。

はじめは、張りきっていましたが、だんだん嫌になってきました。

というのも、新1年生のAちゃんが、毎日途中から泣いてしまい、家に帰りたいと言い出すのです。なんとかなだめながら連れて行こうとするのですが、何度も立ち止まってしまうので、学校に着くまですごく時間がかかります。

毎日こんな調子なので、始まって半月も経つ頃には、私もクタクタに疲れてしまいました。でも、Aちゃんは、学校に着いてしまうと、通学の様子が嘘のようにみんなと楽しく過ごしているので、そんな私の苦労は誰にも分かってもらえませんでした。

私は、ある日、家に帰ってお母さんに

「もう私、通学班長やめたいわ。」

と、言いました。そして、自分だけしんどい思いをしていることを話しました。

すると、お母さんは次のように話してくれました。

「あなたが小学校に入学した時、6年生のBさんが通学班長だったでしょう。お母さんは、あなたが一人で学校まで歩いていけるかって心配だったのよ。そんなとき、Bさんに『疲れていない？』とかいつも声をかけてもらってるって、あなたから聞いていたので、お母さんとても安心していられたのよ。」

「私だってAちゃんが泣いてしまったときには、ちゃんと声をかけてるけど・・・」

「Bさんって、いつもニコニコしている優しい人だったわね。」

私はお母さんとそんな話をしながら、いつも優しく声をかけてくれたBさんのことをいろいろ思い浮かべていました。

そしてお母さんは、

「お世話になったことは、その人に返せなくても次の新しい誰かに送っていくということもできるのよ。」

と言って、『恩送り』という言葉があることを教えてくれました。

私はそれを聞いて思いました。

「恩返しは、恩を受けた人に返すのだけど、次へ次へとつながっていく『恩送り』って素敵だなあ。」

そう思うと、気持ちも少し和らげられました。

次の日から私は、泣いた時に声をかけるだけではなくて、Aちゃんを誘って集合場所まで一緒に行くことにしました。

そんなことを続けるうちに、Aちゃんは、少しずつですが通学にも慣れてきてくれました。そして、5月が終わる頃には、Aちゃんは途中で泣いたり、立ち止まることなく学校までの道のりを歩けるようになりました。

大変なこともあったけど、憧れのBさんにちょっと近づけたような気がして、うれしい気持ちになりました。